

V. 爬虫・両生類

星野一三雄

PLATE 1

1) 調査報告概要 1
2) 調査の方法 2
3) 当該生物の解説 2
4) 確認種リスト 3
5) 重要な生息地の候補 4
6) 確認した外来種のリスト 4
7) 外来種の解説 4



アカハライモリ



シュレーゲルアオガエル



タワヤモリ



タワヤモリ



ツチガエル



タゴガエル



ニホンマムシ



シマヘビ

1) 調査報告概要

延岡市における、両生類・爬虫類の分布調査は、2000年に発行された「延岡市環境基本計画 自然環境調査 報告書」および2001年に発行された「延岡市環境基本計画 自然環境調査 報告書およびデータ集」が代表的なものであるが、合併された北方町、北川町および北浦町ではそのようなデータは乏しい。

本調査では、特に合併によって延岡市になった地域を中心に両生類と爬虫類の分布のデータを集積することを目標とした。

2000年に発行された前出の報告書では、延岡市に産すると考え得る両生類は13種、爬虫類は16種である、とされたが、今回の調査結果では両生類は、前回には除したオオダイガハラサンショウウオを入れて14種、爬虫類はタワヤモリを加えて17種とするのが妥当であろう。

調査は1999年から2010年まで行い、その期間内に両生類は無尾目（カエル）7種、有尾目（イモリ、サンショウウオ）2種を、爬虫類は有鱗目（トカゲ、ヘビ）7種、カメ目淡水性3種を記録した。なお、このうちカメは2種が外来種であった。

調査の対象地域が広いことと調査の回数が少ないことから、特に2000年では言及されなかった山間部の有尾類と旧北浦町のタワヤモリの分布調査を主に行うこととした。

これらの地域のうち、旧北方町の山間部の広葉樹林帯の渓流域では、環境省版レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類と評価されているオオダイガハラサンショウウオがまとまって記録されている。文献による記録ではあるが、筆者も2004年に旧北川町付近の大分県との県境の大分県側でオオダイガハラサンショウウオを発見しているため、当該地域に広く分布しているものと考えられる。

一方で、この地域でもっとも一般的であるとされ、旧北浦町三川内塩見山で1999年に発見されたと報道されたブチサンショウウオ（現在はコガタブチサンショウウオとされる）は確認することはできなかった。

爬虫類の有鱗目の一種であるタワヤモリは、本州と四国の瀬戸内海沿岸部に生息するが、周防灘と豊後水道に面した九州北東部の沿岸部にも生息することが知られており、その分布南限が延岡市付近と推定されており、今回の調査でも五ヶ瀬川河口の北岸付近まで生息が確認された。これにより、延岡市はタワヤモリの最南端の分布域ということになり、学術的に意義深いことであるため今後はその生息状況に注視する必要があると考える。

いわゆる人家付近に生息するニホンヤモリとの識別が難しく、生息密度等の詳細なデータや情報がないため、対応は難しいが、幸い国道388号線日豊リアスラインの開通により、交通量が少なくなった東海町から浦城町までの県道212号線沿線に本種の姿が多く確認でき、比較的生息環境は良好に保たれていると言える。

この10年間では、東九州自動車道関係の大規模な工事が行われたため、大きく環境が変化した場所はあるが、延岡市全体を見た場合、両生類や爬虫類の生息に大きく影響する可能性がある環境の変化はないと思われるため、両生類・爬虫類にとっては比較的良好な自然環境が保たれていると結論づけて考えられる。

2) 調査の方法

1999年から2010年の期間にわたり、11回の現地での生息調査および文献調査、情報提供による調査を行った。

現地での生息調査はロードセンシングを主たる方法とし、生体（卵嚢や幼生を含む）あるいは遺体の目撃、採集、鳴き声の確認、をもって生息の確認とした。

3) 当該生物の解説

・オオダイガハラサンショウウオ *Hynobius boulengeri*（環境省レッドリストカテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類）

本州の近畿地方南部と九州の祖母山系に分布するとされる流水性の小型サンショウウオ。近年まで四国の個体群は本種とされていたが、2007年に改めて別種イシヅチサンショウウオ *H. Hirosei* とされるようになっている。

全長 20cm ほどで、小型サンショウウオとしては大型になる。背面は黒褐色から青みがかった灰褐色で明瞭な斑紋や斑点はない。

山地の森林の谷や斜面に生息し、源流域で 2～5 月下旬に繁殖を行うが、宮崎県の個体群に関しては詳細な記録はない。孵化した幼生は、その年の 8 月下旬から 10 月上旬に変態して上陸するが、旧北方町では 11 月に幼生が発見されているため、幼生のまま越冬し翌年の秋に変態・上陸を行うと推測される。

・タワヤモリ *Gekko tawaensis*

大阪府から広島県および四国の瀬戸内海沿岸および大分県に分布するとされるヤモリの一種。日本固有種であり、延岡市五ヶ瀬川河口北岸（延岡市東海町付近）が分布の最南限と考えられる。

全長 10～14cm ほどであり、灰褐色地に暗褐色の斑紋がある。よく似ているニホンヤモリ *G. japonicus* とは、背面に粒状の大型鱗がないこと、オスの総排泄孔の両側にあるイボ状の突起が一对であること、尾部の付け根付近の環状斑紋が W 字にならないことの三点で見分けることができる。

主に海岸付近から山間にかけての岩場に生息しており、夜間には交通量の少ない道路上にも出てくることがある。また道路の舗装された法面でもよく見かける。一方、ニホンヤモリが生息する人家周辺にはあまり生息しておらず、夜間の灯火に集まってくるようなこともない。

夏に、岩の割れ目等の隙間に固着性の卵を 2 個産みつける。

4) 確認種リスト

両生類

No.	目	科	和名	学名
1	有尾目	イモリ科	アカハライモリ	<i>Cynops pyrrhogaster</i>
2		サンショウウオ科	オオダイガハラサンショウウオ	<i>Hynobius boulengeri</i>
3	無尾目	アマガエル科	ニホンアマガエル	<i>Hyla japonica</i>
4		アカガエル科	タゴガエル	<i>Rana tagoi tagoi</i>
5			ツチガエル	<i>Rana rugosa</i>
6			ニホンアカガエル	<i>Rana japonica</i>
7			ヌマガエル	<i>Fejervarya limnocharis</i>
8		アオガエル科	シュレーゲルアオガエル	<i>Rhacophorus schlegelii</i>
9			カジカガエル	<i>Buergeria buergeri</i>

爬虫類

No.	目	科	和名	学名
1	カメ目	スッポン科	ニホンスッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i>
2	有鱗目	ヤモリ科	タワヤモリ	<i>Gekko tawaensis</i>
3			ニホンヤモリ	<i>Gekko japonicus</i>
4		トカゲ科	ニホントカゲ	<i>Plestiodon japonicus</i>
5		ナミヘビ科	アオダイショウ	<i>Elaphe climacophora</i>
6			シマヘビ	<i>Elaphe quadrivirgata</i>
7			ヤマカガシ	<i>Rhabdophis tigrinus tigrinus</i>
8			クサリヘビ科	ニホンマムシ

5) 重要な生息地の候補

今回の調査結果からのみ考えれば、オオダイガハラサンショウウオが確認された旧北方町鹿川溪谷周辺部は、重要な生息地と言える。

また、繰り返すことになるが、タワヤモリの分布域の最南端になる須美江から東海町の海岸線、特に県道 212 号線沿線は貴重な生息地と言えよう。

6) 確認した外来種のリスト

No.	目	科	和名	学名
1	カメ目	カミツキガメ科	カミツキガメ	<i>Chelydra serpentina</i>
2		ヌマガメ科	ミシシippアカミミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>

7) 外来種の解説

・カミツキガメ *Chelydra serpentina*

北米から中米にかけて生息する中型の淡水性のカメ。

最大で甲長が 50cm 近くになるが、頭部と尾部が長いため、それ以上の大きさに見えることがある。

基本的に全身が褐色であり、目立った斑紋等はない。尾が強大で背面に鋸歯状の大型鱗が並んでいるため、在来の種とは容易に区別できる。

2007 年 8 月に旧北浦町三川内で発見された個体が、延岡市での唯一の報告であると思われる。

動きが俊敏であり大型であるため、取り扱いを誤ると、ケガを負うおそれがある。特定外来生物法で特定外来生物に指定されているため、飼育、所持、販売などが禁止されている。

・ミシシippアカミミガメ *Trachemys scripta elegans*

アメリカ原産の半水生ガメ。

国内では「みどりがめ」と呼ばれ、非常に多くの個体数がペット用に流通している。

延岡市内の数カ所で記録されたが、五ヶ瀬川水系等に多く生息する可能性は否定できない。

ほぼすべてペットして逸出または遺棄された個体と考えられる。

特定外来生物法では要注意外来生物として指定されている。